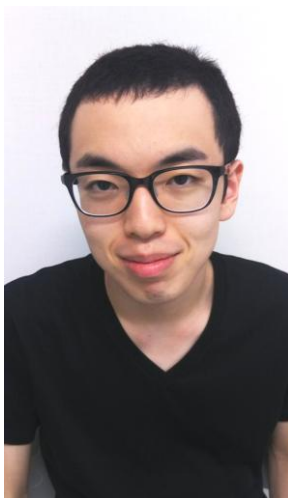


KSKQ

ゆうとおん通信

NO.114	2019 年 11 月号	郵便振り込み口座 00910-9-106532
編集人 (社福) ゆうとおん 編集員会 八尾市久宝園 2-30-4		



藤本 圭一 (ふじもと・けいいち)

1998年羽曳野市生まれ。八尾支援学校高等部
卒業後ゆうとおんに。八尾市在住。20歳

ゆうとおんのパン工房で働き出して早3年。真っ白な作業着に身を包み、もくもく働く姿はもう職人さんそのもの。片手でパン生地をまめるのは結構むずかしい作業ですが、わずか一週間でマスターし、一年後にはリズムカルに両手でまめることができるようになりました。「作るのが好きで、高等部の実習は3年間ゆうとおんに通いました」「パンは食べるのも好き。気にいっているところですか？それは好きなことを仕事にできたことです」と迷わず答える藤本さん。家でもお母さんと料理やお菓子作りをするそうです。根っから好きなんです。

ここで、生きる

人シリーズ No.13

苦手な数字はノートに書いて作業前に確認、鉄板に並べるパンの数を間違えないようにしています。接客も得意でNHK大阪放送局内の販売でも活躍。「自分の作ったパンが目の前でどんどん売れるのを見ると、すごくうれしい」と目を輝かせる藤本さん、その気持ち分かるなあ。

隠れた特技は、毎週土曜に習っているヒップホップダンス。長い手足が躍動します。記憶力抜群！見ただけで車種や車名を言い当て、街中の看板が好きで英語でも簡単に読めます。それから、なんといっても字がめちゃくちゃうまい。

最後に聞いてみました。
好きな人は？の質問に、イケメンは表情ひとつ変えず「いまのところいません」とそっけないお返事でした。

(聞き手・中谷将法)

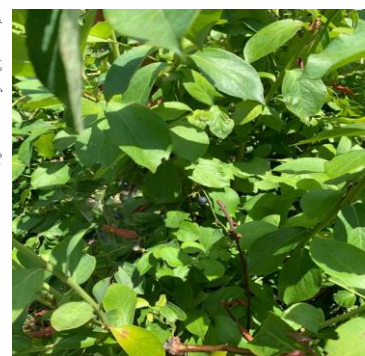
- 目
- ・特集 奈良「ちいろば園」さんとの交流会 …… (3)
 - ・虐待について考える No.6 堀 智晴 …… (4)
 - ・「ちい食食堂」土橋/「家族交流会」を終えて 松田… (5)
 - ・支援の現場から「グループホーム」山本 寿… (6・7)
 - ・リレーエッセイ 富澤久美子 …… (7)
 - ・一泊旅行「淡路島」報告 …… (8・9)
 - ・当世作業所事情No.76 畑 健次郎 (10・11)
 - ・農園始めました 土橋恵子… (12)



しゃかいふくしほうじん かい ちろばえん (奈良県生駒郡三郷町) 社会福祉法人ちろば会

奈良「ちろば園さん」との交流会感想

この夏、ゆうとおんの当事者の会「みんなできめる会」は、ちろば園さんを訪問し交流してきました。ちろば園のみなさんは、昨年のピープルファースト奈良大会で活躍されました。『ちろばだより』の「ブルーベリー狩り体験ができます!」の記事を見て、体験もしたいけど、みなさんと話してみたいという声が上がりました。猛暑のなか8月8日に行ってきました。



実を収穫した後のブルーベリー

●ブルーベリーおいしかった。はじめてなのに、すぐ、うちとけて「オイ!」ってかんじだった。交流会の質問コーナーがいちばん楽しかった。「ちろば園さんには、イケメンの職員はいますか?」が大うけで、「やった!」と思った。うけたぞと思った。(岩井眞美那)

●ちろば園は初めて行っただけで、少し緊張しました。ブルーベリー作りやクッキー作り、軽作業のところを見学して、ゆうとおんといっしょで、みんな、がんばっているなあと思いました。交流会では、日頃やっているパンの仕事と、きめる会のこと、ちろば園のみんなに聞いてもらって、よかったと思いました。

●ブルーベリーをたべにいったわけではないけど、ブルーベリーはおいしかった。よかったことは、ちろば園のメンバーと交流できたのがよかった。しゃべれたけど、もっともつとしゃべりたかった。(小林淳子)

また、質問コーナーに答えられたのがよかったと思います。終わってからちろば園の人に名刺を渡せたのがよかった。また、ぜひ、行ってみたいです。(青山祐二)

●クッキーとケーキ作っているところが一番よかった。パウンドケーキ、ゼットたい、おいしいと思う。とても気に入った。みんな、やさしい人ばかり。楽しかった。木がいっぱいあって、お花も咲いていてよかった。もう一回、ちいろば園に行きたい。わたしも、ちいろば園で働きたい。

(西矢育子)

●最初のあいさつが、うまくできたことが、うれしかった。初めは、緊張していたけど、自分の仕事の紹介の発表もうまく言えて、うれしかった。ここまで自分なりに職員といっしょに一生懸命やってきたから、ちゃんと言ってよかった。また交流会があったら参加したい。今度は、ちいろば園さんが、ゆうとおんに来てくれたら、うれしい。

(宮田裕子)

●ブルーベリー、おいしかった。たのしかった。またいく！

(中西政信)

●おちついて自分から質問できたと思う。私は「門限はありますか？」って聞いたけど、グループホームの決まりのことなど、もつともつと聞いてみたかった。

(松田まゆみ)



ブルーベリー畑にて。右は収穫したもの。甘くてとてもおいしかったです。

●ちいろば園に行ってみたら、ゆうとおんでやっているのと同じ仕事、みかんちぎりをやっていました。交流会をやつて、ちいろば園の人にも、私たちの仕事をわかってもらえたかなって思う。たのしかった。

(寺田直加)



交流会は、みなさんの質問でおいに盛り上がりました。もつと、もつと話したかったという感想が多かったです。



ちいろば園さんの喫茶で仕事の説明を受ける「きめる会」のメンバー。



堀 智晴（ほり・ともはる）

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。

インクルーシブ（共生）教育研究所代表。ゆうとおん監事。

No.6

虐待について考える

『オープン・ダイアログ』のやり方でやってみよう！

今回は「オープン・ダイアログ」について、知ってほしいと思い、書きました。このやり方は、簡単に言うと、〈困った人の問題を仲間です話して支えていこう〉というやり方です。

正確には、このやり方は精神障害のある人への対応方法の一つです。今世界で注目されていて、その効果もはつきりと出ているそうです。北フィンランドで始まった方法ですが、一対一で解決するのではなく、困っている人の関係者が対等の立場で真剣に話しあう問題の解決について相談しあうというやり方です。大事なことは、そこで出されたいろんなアドバイスを、困っている人に押しつけないという点です。最終的には、困っている人、悩んでいる人が自分でどうするかを考えていくのです。まわりの人たちのアドバイスをヒントに〈本人が自分で考えていく〉という方法です。すぐ効果が出ないでも気にしないでいいよ、という考え方にたっています。

つまり、当事者主体の考え方です。障害者権利条約の基本は、「私たち（障がいのある私たち）を抜きに、私たちのことを決めるな」ということでしたが、この「オープン・ダイアログ」のやり方もこの考え方にもとづいています。

虐待は障がいのある人、その人を苦しめることです。そのようなことがないように虐待防止を工夫する必要があるのです、この連載もそのことを考えてきました。しかし、虐待の防止を考えると同時に、困っている人、悩んでいる人をまわりにいる人たちが助けあうことも必要ですね。

専門家や誰かがリードするのではなく、開かれた気持ちでいろんな人が対等の立場で、対話を大事にして真剣に話し合おうよ、ということなのです。

ですからこの方法は、人と人が共に生きて生活しているいろんな場面でもとりいれることができます。やり方だと思っています。

あせらず、ゆつくりと、助けあっているように、そうすれば少しずつだけど、いい方向に変わっていくのではないでしょう。

活動紹介

OPEN 毎月第1・3土曜日 9:00~15:00

ありありすのちいき食堂



お待ちせ、さあ、始まるよ。ちいき食堂

2017年4月から始めたありありす「ちいき食堂」、当時4年生だった子どもが、もう6年生。背が伸びて体も大きくなりました。朝、9時前になると自転車で行ってきた数人の子どもが玄関で待っています。

「おはよう」のあいさつもそこに食堂を抜け、休憩室へ。持ってきたゲーム機を出して、自分のゲームに熱中というのが、いつもの光景だったのですが、今は、将棋をしたり、トランプや他のゲームで盛り上がっています。

学生さんと一緒に、うきうき、わくわく

それというのも、大学の教育コラボレーション演習ということで、大阪教育大学の学生さんが来てくれているのです。昼ごはんづくりにバタバタしている口うるさいおばちゃんより、一緒に遊んでくれるおにいさんやおねえさんが子どもたちにとって面白くて楽しいか。この前は、浸水紙を使って、色を分ける実験をやってくれました。今度は、子どもたちといっしょに、おやつのパンケーキ作りに挑戦するそうです。美味しいパンケーキ、期待しています。

(土橋 恵子)

9/26

家族交流会を終えて

ゆうとおんでは、二ヶ月から三ヶ月に一度くらいのペースで家族交流会を開催しています。こういった機会にしか、お会いできることができないご家族さんも多数おられ、貴重な時間ともなっています。

交流会と名がついておりますが、内容は主に、ゆうとおんのこれからの事業の方向性をお伝えし、それについて、ご家族からの要望や疑問点などを聞く場となっています。

個人的に、交流会に参加する上で、いつも意識しているのは、情報は非対称であるということ。現場の職員は、作業所やグループホームで多くの時間を共にすることで、みんなの日常に関する情報を沢山持っています。(逆に、家での様子は、ご家族から聞いた以上のことは分かっていませんが) 福祉サービスに関しても、仕組みを理解しないと運営できない以上

制度に関する情報を沢山持つことになりました。日々の業務の中で、圧倒的に多くの情報を抱えているのはゆうとおんであり、情報を持っている側には、持っている側の気持ちが見えにくいもので、いつでも気をつけていないと、その事実を忘れてしまいます。

ご家族がどんなことに不安を感じ、どんなことに疑問を感じておられるのか、常に敏感でないと、いつだって紙一重のところ、不信任が生まれてきます。簡単ではないですが、難題でもないはず。これからも大切な時間をムダにすることなく、多くのことを共有していきたいと思います。

(松田 健太)

■支援の現場から

グループホームの「世話人」という仕事の将来を思う

生活の場「わらゆん」の部署に異動してきて半年以上が経過しました。
いま改めて世話人という仕事について感じることを書きたいと思います。

(山本 寿)

経験やスキルが問われる世話人の仕事

世話人という仕事は奥が深いと思っています。障がいのある人ひとり一人の、自分らしい生活を応援するキーマンは、日々寝食をもに作る世話人さんたちであることは言うまでもありません。時には一人で4〜5人のメンバーさんの支援(相談や介助)にあたることもあります。誤解を恐れずに言えば、世話人の仕事は、メンバーさんとの距離の取り方など生活の場であるがゆえの特有の支援の難しさがあり、日中活動のスタッフに比べ、より経験やスキルが問われるポジションだと思います。少なくとも私はそう思っています。

職業としての社会的課題

どこの事業所もそうかもしれませんが、慢性的な人不足もあってか、今の「わらゆん」には、「経験不問、誰でも明日からハイ世話人」といった空気が流れていて、世話人としての専門性や周囲からのリスペクト感が感じられない?のは残念なことです。

社会的認知度も低く、前途洋々たる未来ある子どもたちの、将来の職業選択肢のかけらすらなく、というよりもそんな職業があることすら知らないというのが現状かと思っています。夜勤という一般にはあまり好まれない労働条件に加え、医療従事者(看護師等)に比べても安いであろう待遇面の悪さ、専門性

が確立されていないグループホーム(以下GH)の世話人という職業的な位置づけの曖昧さなど、今後GHという生活の場が、障がいのある人たちの暮らしの場の選択肢の一つとして、しっかり存続していくための課題はたくさん残っています。

資格要件の強化だけでは解決しない

では何故GHの世話人の専門性が確立されず、社会的認知が広がらないのか。この業界の仕事では障がい者施設の生活支援員のほうが、まだ一般的にはピンとくるのかなという感じがしています。要は世話人も日中の生活支援員の同列上に位置し、配属先がたまたまGHになったというのに過ぎないのかもしれない。(GHのみを運営している事業所は別ですが…)

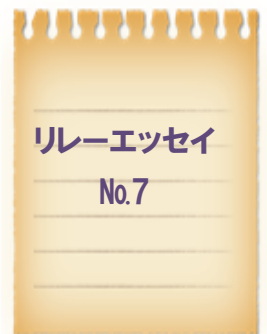
ここ数年、強度行動障がいの利用者さんへの専門研修は各地で実施されていますが、勿論、GHの利用者さんが、すべて強度行動障がいの人とは限らないので、そのことが直接世話人の条件に反映されている訳ではありません。その他、現状様々な障がいに応じた研修や介護福祉士等の働く上でプラスになる資格はありますが、それを世話人としての条件にするのは、事業所次第ということになります。充分な財源もなく、絶対的な人手不足の中、世話人の必要条件の敷居だけを今上げることは、絵に描いた餅になる恐れは十分にあります。しかしながら、夜間

一人で支援にあたることが多い状況の中、世話人の適性といった問題は確かにあり、対人援助の専門職として考えるなら、その資質・スキル向上に向けた努力は、常に問われなければならないと思います。

諦めずに向き合っていく姿勢

少々堅苦しい文章になってしまいましたが、利用者さんの状況次第で少し息が抜けたり、逆に、緊張感が続くこともあるホームの現場で、解り合えたと思ったり、やつぱり難しいと感じたり、世話人の思いは日々揺れています。正直、試行錯誤の連続かと思えます。もちろん、専門知識さえあれば、それら全てが解決される訳でもなく、むしろ知識に頼るあまり、利用者さんに対して“まず同じ一人の人間”という大切な出発点を置き忘れてしまう恐れさえあります。結局のところ、資質といっても日々、葛藤する中、利用者さんの自分らしい生き方を応援するため、諦めず向き合う努力を続けられるかどうかという抽象的なものになってしまいます。

さて、現状、生活の場「わらゆん」において、世話人の役割・仕事に関して具体的に何が必要で何が問われるのか。今回は実際の現場の状況に照らし合わせてながら考え書いてみたいと思います。



ラグビー大好き！

ラグビーワールドカップが日本で開催。えっ？！大丈夫かいな…と思った。ラグビーファンの私としては、花園ラグビー場で行われる試合が、スタンドがガラガラでは、選手たちに気の毒だと心配、遠い国からやってくるラグーマンたちを応援しに行かねば！と変な気を遣っていた。いざ始まると、そんな気づかい等どこへやら、どの会場も大入り満員で、ワールドカップの経済効果は、4300億円だとか…いらぬ心配であった。

それはさておき、私が、ラグビーを好きになったのは、高校生の時に片思いの子が、ラグビー部にいたからだ。ラグビーには、そんな青春時代の胸キュンな思いもある。そして息子ができ、何かスポーツをやらせたいと思う、小1で剣道を、その次にスイミングと、どれも1年と続かなかった。そして小4で八尾ラグビースクールに出会い、何と大学1年まで、10年続けることができた。よく頑張ったものだ。小学、中学と八尾ラグビースクールで、お世

話になり、親たちもいつも一緒に練習、試合と子どもたちの応援に精を出していた。淡路島や、菅平へも駆けつけ、「行けー！走れー！押せー！まだいけるー！」とギャーギャーワイワイ大声で声援を送る親。子どもたちのチームワークやタックルや、トライ以上に、親たちの結束も強まり、楽しく、熱くなれた。

とにかく、ラグビーは、見るのも応援するのも楽しい。桜のジャージ日本チームがいろんな国の選手で構成されているのもいい。

ONE FOR ALL ALL FOR ONE です！

これを書いているのが、10月13日。スコットランドに勝利し、見事にベスト8進出！おめでとう！♥
そして、この通信が皆さんのお手元に届くころには、ワールドカップ優勝！なんてことになっているかもです。

(富澤 久美子)



10/10～11 一泊旅行

淡路島に行ってきました！

まだ暑さの残るなか今年も「一泊旅行」
に行ってきました。

総勢 110 名、バス 3 台に分乗して淡路島
の旅を満喫してきました。



HELLO KITTY SMILE

ハローキティスマイル



なにしろ大所帯なのでお昼ご飯を食べるのも大変！

どこでもキティがお出迎え



須磨水族館

2 日目



宴会

18 : 00 ~ 20 : 00

踊った・歌った・笑った・食べた・楽しかった！

一泊旅行のお楽しみは、なんといつても恒例の宴会。みなさん慣れたもので大活躍、職員の出番なんてありません。広間には爆笑が続きました。



大広間で夕食を囲みながら。舞台ではメンバーによる出し物が始まりました。



もったいないから
残さず全部食べるぞ

● 当世作業所事情 76

「みんなでつくる暮らしの場」を

畑 健次郎

あおくんはきいろちゃんと会えて、うれしくてうれしくて、二人はみどりになりました。

でも家に帰ると、この子はだれ？と不思議がられます。悲しくなったみどりの二人は、青と黄色の涙を流します。わけが分かってお母さんもお父さんも大喜び。こんな何気ない話がレオ・レオ二の「あおくんときいろちゃん」です。

教訓的な話ではありませんが、少し勝手な解釈をしてみます。

あおときいろの別々のままでは物足りないし、一色になっても困ります。みどりの部分は他者との共感と、おたがいさまという共生の領域です。私たちの場に引き寄せて考えると、「支援者」、「被支援者」の関係と役割がくつきりしてくるほど、みどりの領域は縮小していきます。

「支援者」＝職員は管理主義への疑問がうすれ、「被支援者」＝障害当事者は管理されることに慣らされていきます。この間、少しみどりの領域が減ってき

ているような気がします。

子どもの頃、授業を受けるのが苦痛でした。机の前から解放されたい私は、時間が早く流れることを願っていました。高校生くらいになると、授業中にこっそり小説を読むことも覚えて、なんとか時間と折り合いをつけることができるようになってきました。一方で、集団の中にいる居心地の悪さをはっきり自覚するようにもなりました。集団にまわりつく「支配」と「従順」、そして「群れる」というイメージが苦手でした。今も、人間嫌いではありませんが、相変わらず集団に馴染めない自分がいます。

こんな私が理事長に就いているのですから、ゆうとおんは迷いながら揺れながらのよたよた歩きが続いています。この間、みんなの尽力で法人としての組織整備は進んでいます。へんてこな理事長さえないになれば、もつときちゃんとした法人らしい法人になるのにも思っている人たちもいます。ある面ではそうかも知れないと思うので、少し申し訳ないような気もしています。

多少なりとも法人運営にあたっての自戒のようなものがあるとすれば、できるだけ上下関係をつくらない、だれとでも対等な関係でありたいという、言うは易し、行い難しの基本姿勢を大事にしたいという思いです。

今一つは、「支援」、「被支援」という固定的な関係を結び直すための想像力をはぐくみつつ、「生き難い」人に寄り添うという、これまた言うは易し、行い難しですが、ゆうとおんの原点を忘れないということです。

この社会は「生き難い」人を平気ではじき出します。先日の台風の折り、住居がないという理由で、ホームレスの人を避難所から締め出した役所の非情は、この社会の価値観に根ざしています。

せめて縁あってゆうとおんにやってきた障害当事者はだれ一人排除しない、たとえ「犯罪」を犯した人であってもというのがゆうとおん運営にあたつてのささやかなモラルです。

ゆうとおんのスタート時、障害当事者と共に活動する中で、楽しい時間をたくさんつくりたいと思いました。もちつき、まつり、一泊旅行：そうした記憶が、今も支えになっています。

10月10日・11日の一泊二日の旅行の報告は見ていただいたと思いますが、みんなそれなりに楽しい二日間を過ごすことができました。そのために実行委員をはじめ各職員ががんばったことは十分わかったうえで、私が感じた違和感を述べてみたいと思います。

110人という規模による要因も大きいと思いますが、一泊旅行という非日常体験を心待ちにしている通所メンバーと、泊りがけの「仕事」をつつがなくこなさねばという職員との意識の乖離が、ますます大きくなってきているような気がしました。

たとえばAくんは、ゆうとおんの帰り道、アリオに寄り道してゲームを楽しんだり、友達と食事の約束をしたり、時には一人で梅田まで出かけ好きな映画を観たりもしています。そんなAくんも、(担当)職員から小遣いの使い途を細かく記録されていきました。Aくんに対して、そんな「仕事」が必要なのかという私の違和感は、時代遅れの古臭い人間の繰り言に過ぎないのかも知れません。

おたがいさまの領域でのサポートと、サービスのマニュアル化という、似て非なるものの中で、「スモール・イズ・ビューティフル」と言いながら違うことをしてきたのは他ならぬお前じゃないかという、もう一人の自分の声が聞こえてきます。



授業は苦痛だったと言いましたが、時々興味を惹かれることもありました。産業革命時、ラッダイト運動という機械打ちこわし運動がありました。現代にも通じますが、技術革新を前にして、自分たちの職と尊厳が奪われるのではないかという危機感を強めた労働者が、各地で生産手段たる機械の打ちこわし運動をおこします。社会的所有関係の問題としてではなく、生産手段的を絞った運動はやがて衰退していきますが、人間の尊厳を守るという原点は、労働運動に引き継がれていきます。

1810年代初期からはるかに時を経た1970年代ごろ、「コンピューター導入反対」という運動が

ありました。公的機関へのコンピューターの導入は、国家による個人管理を強める国民総背番号制へつながるといって危惧でした。私はその言い分は正しいと思います。今も管理社会の強化には反対ですが、コンピューターそのもののアレルギーも持ち続けることになりました。おかげでネットの活用など夢のまた夢です。時代からはみ出したところで、時代を語ってもどこにも届きません。ひよつとして今の自分の位置はそんなところかもしれないと妙に納得したりもします。

弁証法の授業も面白いと思いました。テーゼ(肯定)があり、アンチテーゼ(反肯定)があり、アウフヘーベンがあります。この訳が二つあり一つは止揚、今一つは揚棄でした。どっちがふさわしいのか、そんなことだけは真剣に考えました。



さて、話はようやく本題に入ります。私たちは「施設から地域へ」という流れに沿ってグループホームを開設しました。

グループホームで目指したものと、実態との落差は次の機会に譲るとして、今のままでは、ゆうとおんから入所施設へという逆流現象もおこりかねません。親はどうしても自分たちが居なくなった後のことを考えます。兄弟姉妹にはできるだけ負担をかけたくありません。まともな受け皿もない中で、やっぱり入所施設しかないかと思っても無理ありません。

グループホームという形態だけでは対応できない人たちもいます。多様な暮らしの場の提起と、その実践を通して先行きへの希望を提示する必要があるです。

遅ればせながら、ゆうとおんにおいてもそうした場づくりを真剣に考えていかねばならない時期になっています。たとえばグループホームのような共同性もあり、しかしはるかに独立性のある空間が保障され、支援者の確保の関係もあるので、場づくりにあたってはある程度の効率性も考えねばなりません。

ゆうとおんは「みんなで作る働く場」を掲げてスタートしました。常識を疑い、お国のやることはもっと疑い、自分たちのやることはなおさら疑いながら、歩をすすめてきました。疑問のないところでは、一人一人の考える力が育ちません。

「支援計画」や「相談支援」という約束事も、何の疑問もなしにすすめていくと、気が付けば国家による個人管理の露払いをさせられていたという結果にもなりかねません。

時代がどう変わろうと人の意識はそう変わりません。まして権力側の人たちの支配欲という野望はなおさら変わりません。

自分に残された時間の中で、どこまでやれるのかわかりませんが、「みんなで作る暮らしの場」に向けて、自分にとってのおわりの始まりの課題に取り組みたいと思います。

活動紹介

ビオトープで畑作りを始めました。



以前、ゆうとおんでも小さな農園を借りて野菜作りをしたこともありましたが、歩いて行くには少し遠く、夏の水やりも大変で続けることが出来なくなりました。そこで、すぐ近くにある八尾北高校の、ビオトープの広い空き地の一部を借りて、ゆうとおんの活動の場として畑づくりができないかと考え、当時の校長先生に相談した結果、快諾をいただきました。

何度か、数人でビオトープに見に行きましたが、草が生い茂る空き地に尻込みしてか、やろうという声が上がらず、そのまま1年以上…。

今回、はーとの職員Yさんが中心になって、活動の場として農作業を始めることになりました。まだまだ暑さの残る9月初め、YさんとSさんの草刈りや瓦礫を取り除きながらの土起こし、肥料を入れての土づくり、連日の汗だくになりながらの作業を経て、9月末には畑の畝が5本、出来上がりました。その畝に、大根、小松菜、かぶ、ほうれん草の種を、みんなで蒔きました。かわいい芽を出し、見るたびに大きくなっています。

(土橋 恵子)



ビオトープの池。メダカやタガメがいます



広い畑で水やり。収穫がたのしみ。

【活動・研修予定】

- 10/24(木) 職員研修 差別を考える DVD上映会「見えない手錠をはずすまで」
- 11/14(木) 職員研修 「自治 -自分たちで決めることの大切さを考える」
講師：小山 広明さん(元泉南市会議員)
- 11/16(土) ありありす映画上映会・京都アニメーション制作「聲の形」
- 11/29(金)～30(土) ピープルファースト大会 in おおさか
- 12/07(土) ゆうとおんまつり

総勢 41 名で
参加します！

社会福祉法人 ゆうとおん

本部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387
 メールアドレス / youtone@live.jp ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>
 年会費 / 1口 2,000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階 定 価 / 50 円